

平成27年度組織目標中間評価シート

部局名：農政水産部 水産試験場

番号	目標項目	目標値・目標の内容	進捗状況 (目標の達成状況および 達成に向けた取組の実施状況等)	年度末 達成見込	目標達成が困難 と見込まれる場合の原因	今後の対応方針 (目標達成に向けた取組および スケジュール等)
1	琵琶湖沿岸帯や内湖の水産資源の再生産の場としての評価と活用技術の確立	・過年度に放流したニゴロブナとホンモロコの琵琶湖沿岸帯や内湖への回帰および産卵状況の把握	・ニゴロブナについては、産卵期の4月～6月に西の湖周辺水路等に産卵遡上した親魚を約300尾採集した。現在、採集魚の測定および耳石標識の確認等を行っている。 ・ホンモロコについては、産卵期の3月～5月に伊庭内湖に産卵遡上した親魚を約1000尾採集した。現在、採集魚の測定および耳石標識の確認等を行っている。 ・放流魚の琵琶湖での分布や漁獲状況を把握するため、H26年度秋～H27春季の漁獲物標本の耳石解析を進めている。 (進捗率50%)	◎		・ニゴロブナ、ホンモロコともに、標本採集地点ごとの耳石データの解析を進め、過年度放流魚の内湖への産卵回帰状況を把握する。 ・漁獲標本解析を進めることで放流魚の移動分散、漁獲への寄与状況を把握する。
		・昨年度に南湖に放流したニゴロブナとホンモロコの回帰および産卵状況の把握。	(ホンモロコ) ・産卵回帰時期の3～6月に南湖において刺網備船調査を行ったところ、採集されたホンモロコは12尾(うち南湖標識魚3尾)と昨年より大幅に減少した。 ・昨年同様に稚魚放流場所付近の湖岸で4/15～5/14にかけて少量ではあるが3例産卵が確認された。 ・南湖エリによる稚魚調査を行ったところ、放流魚とは別群と思われる稚魚が多数採集され、南湖で再生産が行われたと推察された。 (ニゴロブナ) ・水路に設置したカゴ網等では、親魚の採集はできなかった。 (進捗率60%)	◎		(ホンモロコ) ・今年度秋から冬以降の漁獲標本調査を行い、来年3月には今年度放流魚の南湖への回帰調査を始める。 (ニゴロブナ) ・昨年の放流種苗が漁獲対象となるH27年度秋から冬以降の漁獲標本の耳石解析を進め、放流魚の動向を把握する。
2	自然の生産力を活用したセタシジミ資源の回復技術の開発	・漁場への構造物設置によるセタシジミ生息環境の改善効果の把握	・1～5mmに育成した稚貝を放流し定期的に分散状況を確認。 ・設置した構造物周辺等で定期的に採水を行い、貝の餌環境の指標となるクロロフィルaや懸濁物質量を測定している。 ・北海道大学と共同で、安定同位体比分析の手法を用いたシジミの餌の特定と動向把握を進めている。 ・水産工学研究所と共同で構造物周辺に流向流速計を設置し、網を張った状態でのデータを取得し解析中。 (進捗率50%)	○		・松原沖の漁場において、シジミ漁を操業している漁場での流向流速を測定。 ・流向流速データの解析および水槽実験により、最適な構造物の形状を推定する。 ・引き続きサンプル、データの採取を行い、委託先と連携し解析を進める。
		・内湖等で垂下し肥育したセタシジミ親貝による増殖効果の把握と放流技術の検討	・昨年度から西の湖で垂下飼育していた親貝を琵琶湖に設定した試験漁場(松原地先、沖島地先)へ放流し、放流場所において稚貝の発生状況の調査を行った(データ解析中)。 ・親貝肥育に適切な飼育容器の検討を行った結果、水通しの良いメッシュ状の容器が生残率が良かった。 (進捗率60%)	○		・今年度から来年度にかけての垂下にむけて親貝を確保して垂下飼育を行う。 ・他の内湖等での肥育の可能性を検討するために、水温やクロロフィルaの測定を行うとともに一部の内湖には実際に親貝を垂下して肥満度をモニタリングする。

番号	目標項目	目標値・目標の内容	進捗状況 (目標の達成状況および 達成に向けた取組の実施状況等)	年度末 達成見込	目標達成が困難 と見込まれる場合の原因	今後の対応方針 (目標達成に向けた取組および スケジュール等)
3	沿岸漁場環境の現況把握と改善策の提言	・生活排水処理水による河川環境や魚類の行動への影響の有無の確認。	5月から長浜市にある農業集落排水処理水の放流先水路3か所にて、魚類採捕等の現地調査を実施中(進捗率55%)。	○		11月まで継続実施の上、結果を取りまとめる。
		・刺網が汚れる条件(水質やプランクトン量など)の把握。	5月から7月に週に1回、琵琶湖に小型刺網を試験的に一晩吊るし、網の汚れ具合を確認した。刺網の汚損は、プランクトンの死骸等の浮遊物の塊が付着することで発生していた。また試験刺網で確認された付着物と操業刺網で見られる付着物が同様のものであることを確認した。(進捗率40%)	○		5月～7月までの調査結果を9月中に取りまとめる。環境水中の糖類定量法については、9月中に安定して定量できる方法を見出し、10月以降、順次、試料(5月～7月分)の測定を行う予定。また、10月～12月にかけても、試験刺網を琵琶湖に吊るす調査を実施予定。
4	特産魚貝類の養殖技術の確立と普及	アユのピブリオ病治療薬として承認されているフロルフエニコールが冷水病およびイトワヅエラ・イカルリ感染症に効果があるかを確認します。	・冷水病およびイトワヅエラ・イカルリ感染症に対する治療薬承認のため、県内養殖場および水産試験場で各種治験を実施し一定の有効性を確認した(進捗率90%)。	◎		今後は、国への承認申請へ向けて、データ整理および各手続を進める。
		より高品質な養殖ビワマス育成技術開発とその普及。	・魚肉の色揚げ試験に供するため、無色素飼料で試験魚を養成中。 ・昨年度に実施した高水温処理の前倒しによる第二極体放出阻止成績について検討中。 ・血球径の測定に代わる確実な四倍体処理群の判別について、相対DNA量の測定を検討中。(進捗率40%)	○		色素を含んだ各種の飼料でビワマスを養成する色揚げ試験を実施予定。また10月中旬より効率的な第一卵割阻止のための高圧処理のタイミングや全雌群の高水温飼育による偽雄作出可能性の検討を行う。
5	アユ資源動向把握技術の開発	・餌料環境と生残の関係把握	平成24年の産卵量激減の原因と考えられるアユの肥満度低下に着目し、肥満度と餓死との関係を詳細把握する飼育実験を行っている。(進捗率50%)	○		引き続き飼育実験を行うとともに、肥満度低下を引き起こす要因をより明確にするため、種々のデータの検証を行う。
		・魚群構造の把握	・琵琶湖丸搭載の科学計量魚探により、琵琶湖に設定した21本の横断線上で探査したところ、6月のアユ生息尾数は1.1億尾と推定されるとともに、浅水域を除く分布域が明らかとなった。 ・琵琶湖丸では調査ができない浅水域については、7月に小型調査船に搭載した通常魚探により調査を実施し、その結果と上記科学計量魚探との比較により得たデータから沿岸のアユの生息尾数を推定したが、エリなどの漁獲状況と比較して過小評価と考えられた。 ・魚群を構成する魚種の確認のため、中層トロール網の改良(主に開口装置)を行った。(進捗率70%)	○		・科学計量魚探による他の時期の推定や、より精度を高めるための検討を続ける ・浅水域のアユ生息尾数の推定については推定値が実際よりも過少になる要因を検討する。 ・魚群を構成する魚種の確認については、引き続きトロール網の改良による調査を行うとともに、他の漁法(2月沖曳きなど)も検討する。
		・アユの遺伝的特性の変化の確認	・マイクロサテライトDNAを用いて遺伝的特性の変化を解析する手法を確立した。現在、解析用のサンプル採集を行っている。(進捗率50%)	○		サンプルの解析処理を行い、産卵量激減前後の遺伝的变化を把握する。

番号	目標項目	目標値・目標の内容	進捗状況 (目標の達成状況および 達成に向けた取組の実施状況等)	年度末 達成見込	目標達成が困難 と見込まれる場合の原因	今後の対応方針 (目標達成に向けた取組および スケジュール等)
6	オオクチバスの「リバウンド」現象の原因解明と未成魚の駆除技術開発	・オオクチバス「リバウンド」現象の原因解明 ・未成魚に特化した効率的駆除技術開発	・オオクチバスの共食いがリバウンド現象に大きく関係していると考え、共食いが起こる条件を内湖、ダム湖、飼育池において調査中。(進捗率70%) ・各手法(電気ショックカーポート、釣り、サデ網、小型曳網)によるオオクチバス未成魚の捕獲効率を比較した。(進捗率50%)	○		水底の起伏や障害物を立体的に可視化できる魚群探知機を活用した未成魚駆除技術の開発を試みる。
7	新たな外来魚の拡散防止および効率的駆除技術開発研究	・チャネルキャットフィッシュとコクチバスの生息状況把握 ・チャネルキャットフィッシュの生態的特性把握	・生息状況調査の結果、コクチバスでは繁殖場所の下流水域に分布域が拡大していることが明らかになった(進捗率70%)。 ・生態的特性を把握するため、飼育による行動観察や発信機を用いた追跡調査を実施中(進捗率40%)。	○		引き続き、生息状況を把握するとともに生態的特性に関する知見を集積し、駆除技術開発につなげる。
8	琵琶湖の水産生物生産力評価に関する研究	・主要魚介類の資源量推定 ・餌生物実態調査	・ピワマス、ニゴロブナ、ホンモロコは、コホート解析により2006~13年(ピワマスは~14年)の生息量(現存量)とその変動を推定した。アユは科学計量魚探により、6月の琵琶湖の生息尾数を推定した(再掲)。セタシジミ、スジエビは主漁期の現存量推定(面積密度法)に向けて準備中。イサザ、ウグイ、ハスは、資源量推定の基礎的知見を得るためデータ集積を実施した。(進捗率70%)。	○		・ピワマス、ニゴロブナ、ホンモロコについては最新データを収集し、推定値の更新の準備を行う。スジエビ、セタシジミは計画通り資源量(生息量)の推定を実施する。イサザ、ウグイ、ハスは計画通り資源量推定に向けて資源構造解明のためのデータを集積する。
		・餌生物実態調査	・エンクロージャー試験を行うための実験装置を製作中。 (進捗率10%)	○		・エンクロージャー実験装置を製作後、生態的特性の把握のため水試港湾にて試験を行う。 ・生理的特性の把握のための室内水槽実験を行う。